



# おじさんズ通信

2024年5月号 (No.42)

発行元：登別市新生町  
桃柿通 緑風舎  
発行者：おじさんズ3号



発行は毎月15日頃。バックナンバーは右のQRコードからどうぞ。



## 春の賛歌 秋への序曲



憂いなき五月の青い空と雲を背に、庭の桃の木がやや濃いピンクの花びらを風に揺らしながら春を謳歌しています。

この地に越してきて30年。転居後まもなく、岡山の友人から頂いた白桃の種をカミさんが鉢で育て、庭に移植しました。その後、何のお構いもしませんが、花を咲かせ、枝葉を広げ、秋には小ぶりの実をつけますが、お先に失礼—と虫たちに中から食べられ、こちら「どうぞ、お好きに」です。隣の柿の木の実もご同様に、ヒヨドリたちの越冬用に毎年放置しています。

この春も、サクラとは趣きの異なる果実の花を愛でられることに感謝です

そして、ささやかなマイ・ガーデンでの「秋の序曲」を見つけました。

「この蔓(ツル)は、何かの実がなるのか？」と、初めて咲いた花をスマホで撮影して保存。その場でGoogle検索窓のカメラアイコンをクリックし、写した花画像を選択すると、(これでしょう)と真っ先に現れた写真が、「アリカント・ブーシェ」なるワイン用ブドウです。「ほら、前に植えたでしょう」とカミさんに言われ、思い出しました。2年前、庭に緑のツルが絡むアーチでも作りたいと、近くのホームセンターで種を購入し、まきました。

調べてみると原産地はスペイン。赤い果肉のブドウということは、赤ワインに化けるのでしょうか。それにしても、掘り返せばミミズがすぐに顔を出す湿っぽい土壌で、実はなるものやら。ひと房でも実ったら、「アリガントウ」と唱えながら、密造しますか。



こうなるかな？

### 其の1 粘り腰の登別商店会

JR 登別駅から中登別方面にかけて商圈が形成されている登別商店会。現在60近い飲食店や商店、事業所や支店などが加盟しています。新型コロナや物価高など、厳しい経営環境にさらされる中で、健闘している部類の商業組織だと思います。



約6年前、この商店会のホームページ(HP)を制作し、運営をサポートしてきましたが、ここらへんが潮時ということで、近く商店会会員の中でITに強い若者がいるとのことで、ボタンタッチすることになりました。

で、最後のHP取材になりそうなイベント「登別桜ざかウォーキング」=写真=が今月12日開催され、無事、掲載を終えました。

この行事、もう20年間も続けられているカギは、実行委に名を連ねる地元商店会の粘り腰によるもの



がんばる老舗や商店会にエールを



といえそうです。とりわけ、八の字マユゲの俳優、高橋克実を連想してしまう商店会長の、若いメンバーのやる気を引き出す「人心収らん術」がお見事と、いつも感心しています。今後も後継者育成の花を、大いに咲かせてほしい—とエールを送る次第です。

### 其の2 室蘭の老舗靴店

先日、室蘭市中央町界隈をブラリ散策していて、靴屋さんのワゴンの前で足が止まりました。軽くてお安い運動靴が目に入り、すぐに買い求めました。

「道下靴店」。もう創業何年になるのでしょうか。この商店街で恐らく、たった1軒だけ残っている靴店でしょう。

若いころ、一緒に演劇した室蘭工大生が、この店の息子が親戚だったような？ 店番のご婦人の返事は「さあ、私の親は兄弟が多くてね」でした。昭和は遠くなり。されど半世紀は軽く超える老舗の歴史、さらに長寿へと祈ります。



## 「赤い騎兵隊」のナゾ

「題名 赤い騎兵隊」「作者マレヴィッチ」「贈 ○  
▽◇×◆企業体」



そう記されたプレートの上  
に飾られた絵=左写真=を  
前に（赤い騎兵隊はどこに？）  
と目を凝らすと、画面中央より  
やや下の地平線らしきところに、  
白い馬上の白い兵隊の列を見つ  
けました。近隣のある施設で見  
かけた一枚ですが、クレーマー  
と勘違いされたら困るので、  
何処とは申しません。

早速、調べたところ作者はカ  
ジミール・マレーヴィチという  
ウクライナ生まれ、ロシア、ソ  
連の有名な画家・芸術家。19  
35年に50代半ばで没してい  
ます。

原画の油絵はロシア美術館に  
収蔵されているようですが、ネ  
ットで販売している画商の複製  
画=右写真=を見ると、どれも  
中央を走るのは赤い人馬の絵ば  
かりで、ホワイト版は見つけれ  
ませんでした。まさか変色して  
白い騎兵隊に？



このナゾ、どなたか解いていただ  
けませんか。

\*\*\*\*\*

## 関川夏央と団塊世代

作家、エッセイスト、評論家でも  
ある関川夏央をご存知でしょうか。  
私より1歳下の同じ団塊世代ですが、  
先日、図書館でこの人の廃棄本を  
手にし、無性にほかの著書を読み  
たくなり、近くの古本屋に出かけ  
ました。

そして見つけたのが文庫本「石  
ころだって役に立つ」（2005年  
第1刷・集英社文庫）

このタイトル、イタリア映画の  
名作「道」（1954年作品）の中  
で、綱渡り芸人の男が主人公の  
ジェルソミーナに「この足元の石  
だって役にたっているんだ」とな  
ぐさめる場面でのワンフレーズ  
ですが、映画を観直すと、なんと  
とも奥の深い言葉です。

廃棄本を読み直して、彼の以下の  
文章にズキッと何かを刺しま  
れました。

「国民一人あたりのGNPが二  
千ドルを越えるとき、失われる  
ものはプロボクシングの強さ、  
政治風刺漫画の鋭さ、すぐれた  
社会派の映画」「得るものは、  
あてのない深夜ドライブ、貧困  
を動機としない売春、不要不急  
の料理知識と料理評論の氾濫」

この30年余り前の予見、当た  
らずとも遠からずー

です。なぜならテレビを見てい  
ると大食い選手権だの、うまい  
店探しといった番組があふれ、  
東京・繁華街での少女売春の  
ニュースに触れると、これから  
の日本社会はどこに向かおう  
としているのか、首をかしげ  
たくなります。

戦後80年近くが過ぎ、社会の  
表層は物心両面で豊かになっ  
た気がしても、内実はいかが  
なものでしょうか。団塊老人  
の繰り言とおっしゃらない  
でください。そして関川本の一  
読と、映画「道」の鑑賞をお  
すすめします。

### 至言・金言

パトリオティズム(愛  
国心)とは初めに自国民を  
愛する心であり、ナショナ  
リズム(国粋主義)とは  
初めに他国民を憎む心  
にある。

(シャルル・ド・ゴール)

### 薫風 烈風

▶「登別温泉に夏目漱石が訪  
れ、揮ごうした色紙を残して  
いきました。拝観料五百円、  
見る？」と言われれば、千  
円出しても見に行きますが、  
残念ながら漱石センセイの  
来泉記録はありません。

しかし、本通信の今年1月号  
で紹介しましたが、有島武郎  
や与謝野晶子、高浜虚子など  
名だたる文人、歌人、書・  
画家、財界人などが残して  
いった色紙や書画など500  
点が、登別国際観光コンベン  
ション協会に保存されていま  
す。

その一部の展示となるので  
しょうか。郷土資料館特別  
展「登別温泉と石川脩次コレ  
クション(仮称)」と題して7  
月20日から10月半ばまで、  
登別市川上公園そばの市郷  
土資料館で開催されるとの  
ことです。しばし、明治、大  
正、昭和の文豪や歌人、画  
家たちの息遣いに触れる  
チャンスです。足をお運び  
になってはいかがでしょうか。

▶先日、久しぶりにビックリ  
することがありました。登別  
市に「ときめき大学」なる講  
座がありまして、年間参加  
費千円を納めようと、近く  
のHY銀行支店に向きました。  
すると、窓口の女性が困っ  
た顔をして「振込手数料88  
0円かかるんですよね」と、  
申し訳なさそうに答え、こ  
ちらも「えっ！ 880円も」と  
驚きました。どうやら、千  
円でも1万円でも、それだ  
け手数料を頂戴するとのこと。  
いや～、分かります、この  
マイナス金利時代ですもん。  
結局「手数料のかからない  
信金さんへ行かれては」と  
の丁寧なるアドバイスに従  
いました。それにしても驚  
いたな～。最近の日銀政策  
動向が身近になりました。で  
は皆さん、お元気で～、